

「雪の夜の話」試論

麻生 和子

An Essay on "A Story of a Snowy Night"

Kazuko ASAO

<はじめに>

昭和19年という戦争末期に発表された「雪の夜の話」は短編ながら、この時期の一家団欒を大切に、気高く生きようとする作者の姿勢を極立たせ、注目に値する作品である。太宰治はその中期において、文学上のいろいろな試みを次々と作品化し、その試みの一つとして、女性独白体の文章で作品を綴り、女性の心理を巧みに描出した。私は太宰治の作品の中で、今まであまり取り上げられることのなかった「雪の夜の話」について、この頃の作者の目指していたものを中心に、いろいろの角度から論じてみたいと思う。

<太宰治の中期の一特徴—女性独白体の文章—>

第二次世界大戦中、とりわけ太平洋戦争の終わり頃の昭和19年は太宰治の「十五年間」においても、〈ひどい時代〉と記され、戦争のために竹槍訓練やいろいろの動員、激しい爆撃や空襲の中、その間隙をぬって小説を書き、発表しても全文削除や出版の中止を言い渡されなこともあった。多くの文学者達が時流に便乗したり、作品を発表せず沈黙したりする中で、太宰は書くことを止めずに次々に作品を発表していく。

太宰の中期（昭和13年から昭和20年8月15日）はいろいろの文学上の新しい試みを模索し、実践した点で非常に面白い時期である。よく指摘されるように、「明るく暖かく平明で愛情あふれる作品」¹⁾は、作者の真剣に生きようとする姿と重なり合う。特に中期の終わり頃は、音楽でいえばモーツァルト、〈苦悩の下に沈んで、澄んだ〉世界のように気高く澄んできる芸術を求め、理想にした。それは、その頃を目指していた〈かるみ〉にも通じていく。「すべてを失ひ、すべてを捨てた者の平安」こそ、その〈かるみ〉だと作品中で語っている。中期の終わり頃を目指していた芸術の一つの方法として、「雪の夜の話」を捉えると興味深い作品である。この頃の長編の中であって、短編ではあるが、心に残る佳品である。更に、中期の作品の中で一つの特徴をなすものとして女性独白体の文章があるが、「女生徒」「きりぎりす」「待つ」とこの作品をつなげて読んでいくのも良いだろう。主人公の肉声が聴こえてくるような独白体の

文章で、読者もその息遣いを身近に感じて、一気に作品世界に魅了され、その世界に浸ることができる。畳みかけるような心情吐露表現や短文をつなげて、断定口調の中に、敬語表現を用いたり、作者の筆は淀みなく進んでいく。読者を酔わせる文体はここでも充分に発揮されていく。古来、「土佐日記」を引くまでもなく、女性に仮託する形で書かれた作品はあり、太宰独自の文学形式では勿論ないが、戦争期とぴったり合う太宰の中期において、読者の要望に応えて次々と女性独白体の文章を書いていることは注目に価する。初期の作品の中にも「猿面冠者」のように、女性からの〈風の便り〉が挿入されていて、その巧みな女性語りが見られ、女性の心理をうまく描写している作品もあるが、中期に極立って多い。昭和17年6月30日に博文館より刊行された『女性』という単行本のあとがきによると、「昭和十二年頃から、時々、女の独り言の形式で小説を書いてみて、もう十篇くらゐ発表した。読み返してみると、あまい所や、ひどく不手際な所などあつて、作者は赤面するばかりである。けれども、この形式の小説を特に好きな人も多いと聞いたから、このたびこの女の独白形式の小説ばかりを集めて一本にまとめてみた。」とあり、作者自身がこの時期、意識的に女性独白体の形式を小説に用いていて、書いていることがわかる。昭和19年に発表された「雪の夜の話」も私(しゅん子)の「あの日、朝から、雪が降ってゐたわね。もうせんから、とりかかつてゐたおツルちゃん(姪)のモンペが出来あがつたので、あの日、学校の帰り、それをとどけに中野の叔母さんのうちに寄つたの。」という告白で始まり、短く読点を打ち、畳みかけるような心情吐露が行われる。誰かに話しかけるような文体は思わず作品世界の中に引き込まれてしまう。

ところで、「回想の太宰治」(津島美知子著)を読むと、この頃の太宰は作品を書くことを中心に据え、その他一切を切り捨てているように思われる。「如是我聞」の中で、「文学に於て、最も大事なものは、「心づくし」といふものである。「心づくし」といつても君たちにはわからないかも知れぬ。しかし、「親切」といつてしまへば、身もふたも無い。心^{こころばえ}趣。心意気。心遣ひ。さう言つても、まだびつたりしない。つまり、「心づくし」なのである。」と述べているが、〈原稿生活者〉として、確固たる覚悟の上で、読者を思いやり、サービスし続けて、誠実さと愛情を作品に表わし続けたのである。

＜戦争末期に描かれた「雪の夜の話」－美しく気高く生きることと守りたい一家団欒－＞

「雪の夜の話」が執筆された昭和19年は年譜によると、「惜別」の構想を立てて魯迅研究を始め、5月には津軽旅行を行い、11月に「津軽」を上梓、同じ年に「新釈諸国噺」の各篇を執筆している。その前年には、「右大臣実朝」や「故郷」が刊行されている。戦争中の太宰の覚悟をさぐる意味で注目したい作品である。昭和19年3月1日発行の「散華」という作品で、その中で、三田君のお便りとして、「大いなる文学のために死んで下さい。自分も死にます。この戦争のために。」とあり、その死を「純粹の献身を、人の世の最も美しいものとしてあこがれ努力してゐる。」と記している。無償の愛、献身を高く評価すると同時に自分は作品を書

くことでそれに応えようとしている姿が浮かび上がる。

「雪の夜の話」についての研究論文は全くない。長編の間にはさまれ、まとまった形で作品論として論じられたことはない。挿入されている「デンマークの話」と風景をたくわえることのできる眼の描写に、短編ではあるが、鮮明な印象を覚える。登場人物は三人だけである。簡単にその内容を説明しよう。主人公、私（しゅん子）は雪の夜にスルメを落としてガッカリする場面から小説は始まる。しゅん子は学校の帰り、中野の叔母さんの家に頼まれていたモンペを届け、お土産にスルメを二枚いただき、妊娠中の兄嫁を喜ばせようと雪の中を家路を急いでいる。その時にスルメを落としてしまう。兄嫁はきみ子と言い、この夏に出産の予定。普段は「カナリヤのお食事」とたとえられるほど、品良く少食であるが、おなかに赤ちゃんがいるせいか、とてもおながが空き、妙なものをほしがる。「口がにがいにがいに、スルメかなにかしやぶりたいわ。」と言っていたのを思い出し、兄嫁にあげたいと思っているので、しゅん子は落としてしまい、何度もスルメを捜す。昭和19年頃、東京で大雪が降り、この作品の描写のように、吉祥寺駅近辺は三十センチくらいの積雪があった体験が基になっている。そして、スルメは戦争中には貴重品でなかなか手に入りにくいものである。兄嫁に申し訳けなく思っている時に空を見上げたら、「雪が、百万の蛍のように乱れ狂って舞ってみました。」〈きれいだな。〉と思い、まるでおとぎ話の世界にいるような気分になり、妙案が浮かぶ。「この美しい雪景色をお嬢さんに持つてゐつてあげよう。」と思いつき、帰宅する。その兄嫁は胎教のため、きれいな人の絵姿を見たりして、きれいな子供を生みたいと考えているので、眼の底に美しい雪景色を写して、それを見せてあげたいとしゅん子は思っている。「人間の眼玉は、風景をたくわえることが出来る。」と教えてくれたのは兄である。その兄は、「お変人の小説家」と妹に言われ、口だけ達者であり家の仕事や力仕事をしないだらしない男として描かれる。この頃、太宰の作品の中によく描かれる、たとえば、「お伽草子」の中の「瘤取り」のおじいさんのように、〈浮かぬ顔〉でお酒ばかり飲んでいる男は姿と重なり合う。戦争中で物がない時代、家人は買い出しに行ったり、野菜などをリュックサックにしょって来てほしいと思っても、〈あさましい〉とか、〈最後の誇り〉〈下品のこと〉と片付けられ、家のためには全くならない。四十歳近くなくても少しも有名な小説家ではなく、身体の具合が悪いと言っては寝たり、起きたりの生活である。胎教のため、孫次郎と雪の小面という能面の写真を壁に貼り、その間に兄のしかめつらの写真を貼った時には、兄嫁に、「あなたの写真だけはよして下さい。それを眺めると、私、胸がわるくなつて。」と言われてしまう。妹にも「兄さんのお写真なんかを眺めていたら、猿面冠者みたいな赤ちやんが生まれるに違いない。」と言われ、取りはずされる。〈孫次郎〉や〈小面〉は濃艶な若い女の面とかれんな美しい若い女の面のことで、〈女能〉に使われる。『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』などに登場する。「どこか薄幸で陰のある若い、あるいは老いた女人を主人公にした能。」「女性たちは生前のはなやかな過去をかたり、みやびでやさしい舞を舞います。」²⁾「井筒」「野宮」「松風」といった作品がある。胎教のためとは言え、そのような写真

を飾るということは、この頃、能に興味があったのかと思います、随想や作品を調べたが、直接、能との関係を示唆する資料は見つからなかった。お茶や文楽については記されていたが、能に対しても興味を覚えていたのだろうか。能面に対して、〈この世で一ばん美しいもの〉と捉えていたのだろうか。下記に、「ポケット日本文学館」3 太宰治 井伏鱒二³⁾を載せたが、小面と孫次郎の写真に女性美の最高のものを感じたのであろうか。戦争の終わり頃、生まれてくる子供のために、能面の写真を飾り、その子の誕生を待ち望む、それは美しい子を望む、作者の切実な願いだったのであろうか。



小 面



孫 次 郎

また、この頃、太宰が大切なものとして考えていたことに、一家団欒と優しく、気高く生きることがある。作品の中で、兄さんの嘘のつくり話かもしれないがと断わった上で、デンマークに伝わる話が挿入されている。いろいろと興味がひかれる内容である。話はこうである。難破した若い水夫の網膜に写る〈つつましくも楽しい〉燈台守りの一家団欒の光景。その一家団欒をこわさないために、助けてと叫ばず、命を落としてしまう。そんなにこわしたくない一家団欒とは何なのか。このデンマークに伝わる話は民話や昔話、文学全集を探したが見つからないので、おそらく太宰のつくり話だと思うが、基になった「一つの約束」⁴⁾は19年頃の発表と推測され、「如是我聞」にも収録された。「一つの約束」⁴⁾をここで紹介しよう。

難破して、わが身は怒濤に巻き込まれ、海岸にたゞきつけられ、必死にしがみついた所は、燈台の窓縁である。やれ、嬉しや、たすけを求めて叫ぼうとして、窓の内を見ると、今しも燈台守の夫婦とその幼き女兒とが、つつましくも仕合せな夕食の最中である。あゝ、いけねえ、と思つた。おれの凄惨な一声で、この団欒が滅茶々々になるのだ、と思つたら喉まで出かかつた「助けて！」の聲がほんの一瞬戸惑つた。ほんの一瞬である。たちまち、ざぶりと大波が押し寄せ、その内気な遭難者のからだを一呑みにして、沖遠く拉し去つた。

もはや、たすかる道理は無い。

この遭難者の美しい行為を、一体、誰が見てゐたのだらう。誰も見てやしない。燈台守は何も知らずに一家団欒の食事を続けてゐたに違ひないし、遭難者は怒濤にもまれて(或いは

吹雪の夜であつたかも知れぬ)ひとりで死んでいったのだ。月も星も、それを見てゐなかつた。しかも、その美しい行為は儼然たる事実として、語られてゐる。

言ひかへれば、これは作者の一夜の幻想に端を發してゐるのである。

けれども、その美談は決して嘘ではない。たしかに、そのやうな事実が、この世に在つたのである。

ここに作者の幻想の不思議が存在する。事實は、小説より奇なり、と言ふ。しかし、誰も見てゐない事實だつて世の中には、あるのだ。さうして、そのやうな事実からこそ、高貴な宝玉が光つてゐる場合が多いのだ。それをこそ書きたいといふのが、作者の生甲斐になつてゐる。(下略)

比較すると、それには、〈デンマークの話〉とはなく、デンマークのお医者も登場しない。水夫も遭難者になつていて、助けを求めて叫ぼうとして、「窓の内を見ると、今しも燈台守の夫婦とその幼き女兒とが、つつましくも仕合せな夕食の最中である。」「助けて!」の声を出せずに大波が呑み込み、亡くなってしまう。「この遭難者の美しき行為を一体、誰が見てゐたのだろう。」誰も見ていない事実というのはあつて、〈高貴な宝石が光つてゐる場合〉が多い。「それをこそ書きたいといふのが、作者の生甲斐になつてゐる。」として、第一線で戦つてゐる人々の〈美しい行為〉を文学に表わし、子々孫々に語り伝えられるであろうと結んでいる。つまり、水夫の死体を解剖してその眼球を顕微鏡で調べ、網膜に〈美しい一家団樂の光景〉が写されてゐた場面の描写は「雪の夜の話」にだけ記される。更に、「惜別」では、「一つの約束」に記された内容に近いものが、周さんの〈即興の譬話〉ということを出てくる。その話の終わりは、「誰にも目撃せられていない人生の片隅に於いて行われている事実からこそ、高貴な宝玉が光つてゐる場合が多いのです。それを天賦の不思議な触角で捜し出すのが文芸です。」となつてゐる。「惜別」も「一つの約束」も文芸(文学)の創造の価値を語つてゐる。「雪の夜の話」にだけ記される、眼に写し出される光景。雪の夜のすばらしい光景を眼に写して帰る妹、しゅん子の行為は兄嫁を喜ばせたい一心の美しい行為の表われで、美しく気高く生きる生き方を象徴してゐる。兄嫁と妹の関係は頼りなく、口だけ達者な兄を批難しながらも二人でしっかりと支え、兄と妹の関係はいろいろな点でだめな兄だと思ひながら、妹は兄のことを根本のところまで信じてゐる。それは、兄から聞かされた話を信じたという妹の言葉からもわかる。兄と兄嫁の関係はどうであろうか。兄の大切にしている一家団樂は、二枚の能面の写真の間に、兄の写真を貼りつけた時に、「お願いですから、その、あなたの写真だけはよして下さい。それを眺めると、私、胸がわるくなつて。」とあり、更に、雪の夜の景色を眼の底に写してきた時に、「とうさんのお話なんか、忘れたわ。たいてい嘘なんですもの。」と答え、兄嫁は〈かなしそうな顔〉をしてゐたとある。そして、しゅん子の眼より、兄の眼の方がよいと言つたのに対して、「でもね、とうさんのお眼は、綺麗な景色を百倍も千倍も見てきたかわりに、きたないものを百倍も千倍も見て来られたお眼ですものね。」と言ひ、兄に対して不信感を募らせる。はっきりと描

かれないが、〈かなしそうな顔〉は〈一家団欒〉を目指して大事なこととして捉えている兄にとっては表面上実現できても、心の底では実現できない理想の姿と写っているのかもしれない。この作品は、人を喜ばせるために美しく気高い生き方をしている人間を描くと同時に、一家団欒にあこがれる作者の姿を強く印象付けている。

<おわりに>

中期に入って、太宰はどのような文学を書くのかについて真剣に迷い、ためらいの時期を経て、いろいろの文学上の試みを行う。他の作品におおまかな筋を借りて記す翻案的小説（たとえば、「聊斎志異」を基にして描いた「竹青」や昔話をパロディ化した「お伽草紙」など）を発表したり、短い文をつなげた独白体中心の「駆込み訴へ」が書かれたり、自己の存在の意味を確認する紀行文「津軽」が執筆されたり、多様な形式を模索し、実践している。先に記したように、「雪の夜の話」も、女性の独り言の形式で書かれた小説で、「女生徒」「葉桜と魔笛」「きりぎりす」「恥」「待つ」などの女性独白体の文章とともに、中期の一特徴をなすものとして、女性の心理を巧みに描いている。今まで取り上げられなかった作品ではあるが、珠玉の小品と言えるだろう。

引用文献

- 1) 渡部芳紀：太宰治のために。国文学 解釈と鑑賞。至文堂，1990。
- 2) 児玉信：能と狂言。小峰書店，1995，p. 26～27。
- 3) 太宰治・井伏鱒二：ポケット日本文学館3，講談社，1995，p. 133。
- 4) 太宰治全集10巻，筑摩書房，1990，p. 291～p. 292。その他，太宰治の作品の引用はすべてこれによる。